

こないだ、某SF雑誌に（まじめな）短篇を書いたところ、編集部が「駄洒落を封印！」というアオリをつけた。しかも、目次にも扉にも作品解説にも、計三カ所にそう書いてある。私が駄洒落のない小説を書くのがそんなに珍しいことなのだろうか。そういえば、この連載も来月でとうとう五十回を迎えるが、第一回から一度として駄洒落を書かなかったことはなかった。そういう私の姿勢が、「駄洒落を封印！」とか書かれてしまう一因なのかもしれない。というわけで、今回は、駄洒落を使わずに、ライトエッセイ風にお送りしたいと思います。どうぞ。

みなさん、こんにちは。仕事をしにいく喫茶店でも、日頃は阪神のことしか言わないオヤジたちが、「次のチュニジア戦には……」と熱弁をふるい、サッカーにまるで興味のない私でさえ、ついついテレビをつけてしまうという恐るべきW杯でも、見ていても、大勢の人間が画面を、ずわーっ、ずわーっ、と行ったり来たりしているだけで、なにをやってんだかまるつきりわからないだけだね。

では、今回はサッカーネタかと考えたあなたは甘い。

なにしろ、ほとんど知識がないので、何も書けないのである。たとえば、イエローカードとかいうのも、なんのことだかわからない。ときどき審判がカードを示して、観客がどわーっとか叫んでいるが、あれはなんなんでしょうね。最初は、誰かがナイスプレーをしたときに、よくやった、という賞賛の気

持ちをこめて、審判が観客に拍手をさせるための指示プレートかと思っていた。よく、テレビ番組でフロアディレクターが腕を回してるでしょ。あんなことかと思っていたのだが、どうやらちがうらしい。あと、オフサイドというのもまるでわからない。何度かきいたのだが、そのたびにちゃんと理解できず、忘れてしまうのだ。こんなサッカー音痴の私だが、一チームの人数が十一人であることは知っている。

昔、「赤き血のイレブン」というアニメがあって、イレブンというのは十一だから、それで覚えているのだ。赤き血のイレブン、と最初に耳にしたときは「赤吉のイレブンって何？」と思ったが、それも今は昔のお話である。

私は正直いって、運動嫌いである。汗をかくのが大嫌いなのだ。できれば、クーラーのガンガンにきいた部屋で、「クーラー効きすぎで頭痛いなー」と言いながら、冷たいビールを飲んでいたいという人間である。しかし、最近、あまりに運動不足であることを自覚したので（なにしろ、一日の運動量は、歩いて五分ほどのところにある喫茶店と家のあいだを往復するだけなのだ）、少しは運動しようと思っ、ちよつと「ラジオ体操第一」をやってみたのだが、なんと、四分の一ぐらいやったところでバテバテになり、息があがってしまい、もうええわ、こんな苦しいことやつてもしやあない……とあきらめてしまった。小学校の頃は毎日朝礼でやっていたのに、あれからたった、えーと……二十年ほどしかたっていないのに、この体力の衰えはなんだ？ なさげなくて泣きそうになった（泣かなかったけど）。これではいかん、というわけで、とりあえず歩くことにした。しかし、日中はめっちゃめっちゃ暑くて汗をかくので、深夜、午前三時頃、仕事有一段落して、一休みというときに、家族を起こさないようにこそつと外出し、あちこちをうろろつろつろつきまわる。



学校にプールがなく、これさいわいと私は泳がなくなつた。たしか中学一年のときのプールの授業が、私にとっての「泳いだ」という最後の記憶である。そのあとは、プールの授業があつたら、なんのканのと理由をもうけてさぼつたから、以来、泳いだことは一度もない。実は二年ほど前だつたか、うちの子供がプールに行きたいといつたので、しかたなく連れていったのだが、私は眼鏡がないとどこに何があるかまったくわからないほどの近眼なので、掛けて入ろうとすると、監視員の兄ちゃんに、ピピーツ、と笛を吹かれ、眼鏡を掛けて入るな、バカ、と叱られた。眼鏡なしでは、たとえ自分の子供が目の前で溺れていても、それが見えないわけだから、あとは嫁はんに全て任せて、プールサイドで寝ていた。水泳なんて嫌いだつ。

ボーリングというのは、どう考えてもたいした運動にはならない、と思われるのだが、やってみるとなかなかどうして結構な運動量があるようである。一年に一回ぐらい、誘われることがあつて、いやいやながらついていくのだが、ボールがどれもこれも重すぎる。一番軽いやつを選んだら、こんどは指が入らない。しかたなく、指が入るなかで軽いボールを選ぶのだが、一ゲームもやると、腕がしびれてくるのである。終わってから、パソコンを打とうとすると、指が震えてしまつて、うまく打てない。サックスを吹こうとすると、指が回らず、いつもなら楽勝のパッケージが全然吹けない。意外と、しんどいスポーツなのである。かなり前、私が某メーカーに務めていたとき、毎年恒例の業界各社対抗のボーリング大会があり、私のいた会社からは社長と常務が出席したのだが、常務が一ゲーム目の第一投を投げようとしたときに、足がつるつと滑つて、転倒し、頭を打って気絶して、そのまま救急車で運ばれた。翌年からは、ボーリング大会の人選からその

常務は意図的に外されることになった。ボーリングは怖ろしいスポーツである。

スキーについては苦い思い出がある。高校のとき、体育の授業の一環ということで、一週間のスキー合宿があり、生まれてはじめてスキーなるものをしたのだが、朝九時から夕方五時まで毎日毎日来る日も来る日もひたすらスキー漬けである。しかも、リフトには一度も乗せてもらえず、開脚歩行とか階段歩行とかいって、歩いて山を登るのである。滑っている時間より、板をばったんばったんいわせながら山登りしている時間のほうが遙かに長かったと思う。そのうえ、私は普通のジーパンにトレーナーで参加しており、防水スプレーとかも持っていないだったので、一度こけたら、ズボンから何からくしゃくしゃである。一番えげつなかったのは雪焼けで、「そついうことがある」という知識を誰も持っていないかったため、雪焼けを防ぐクリームとかはまるでなく、二日目ぐらいから顔がぼろぼろになってきた。痛くて痛くてたまらない。皮膚がじゅくじゅくになって汁が出て、夜、ふとんに擦れたらめちやくちや痛いし、昼間、服の繊維が膿んだ部分にくっついたりして、それもめちやめちや痛い。合宿の後半は、どちらかというと言焼けとの戦いになり、雪を顔になすりつけて痛みを和らげようとしたり（かえって痛くなる）、手持ちのメンソレなどをつけてみたり（死ぬほど痛くなる）と努力はしたが、顔はするするになるばかり。やっと帰宅して、あまりに痛むので近所の皮膚科に行ったら、医者が「うわーっ」と驚いて、「これはどうしたの？ 雪焼け？ ふーん、こんなにひどくなるもんだ」と言ったのを覚えている。合宿は翌年もあり、私は性懲りもなく防水スプレーを掛けないジーパンで参加し、同じ轍のうえを歩くように雪焼けになった。以降、スキーは二度とする気にならない。私は、これまでの生

涯に、のべ十四日間スキーをしたわけだが、その間にリフトにはたった二回しか乗っていないのである。スキーなんか大嫌いだっ。

まあ、私が今後、スポーツをやるとしたら、

- ・汗を掻かないですむ
- ・眼鏡を外さないですむ
- ・手がしびれたりしないですむ
- ・顔がぼろぼろにならないですむ

というようなものでないとだめですね。

てなところで、W杯にちなんで、スポーツ特集をお送りしました。え？　そもそもW杯ってなにか知ってるのかって？　あつたりまえですよ。ついこないだまでは、W杯といわれても、「ウイスキーグラスなら『ダブルで』』といえるけど、杯（さかずき）でダブルというのがあるのか。もしかしたら普通の倍のサイズの杯か」などと思っていたぐらいのサッカー音痴だった私だが、今や「W杯？　ああ、アレね」と涼しい顔で言い切れるぐらいの知識を得たのである。では、W杯とはなにか、と正面切って問われると、さすがに酒器の意でないことはわかったのだが、それ以上は知らないのである。え？　サッカー好きが集まるから杯（さかずき）だって？　なるほど、そうだったのか。ひとつかしこくなりました。しまった。駄洒落を使ってしまったぜ。では、また来月。

（了）